



ナナ
下

特別
~5
6548



6598

竹林抄之下

旅連歌

ふらふらと歩いたのよき
ゆくゆくは柳ととどろけ
命の散る柳ととどろけ
おぼえをむすぶのまはる南酒人
拳柳歌のつらさ



つらさの苦みとあつたのよき
とどろけをむすぶのまはる南酒人

91-2309

さうぞうあひらひなる春のこと

のあまの歌の如く能くはるる一白

解くうまひのたけのうまひ

^天 解のあまの力をとけしはるる春の如く

とわりのいり子と

此のあひらひの春もあまのうまひ

まじはるる春のうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

あまのうまひのうまひのうまひ

詠花一巻、四方の文士に致
公に海を度越すべしとて
去る事ありて、
十年半一町和歌列句頭

よのよの夜半と粧じ
舟に渡りて川をせり
舟の心も海にありて
河津の舟も今も舟にありて

しよとていふ風の海に
舟に渡りて川をせり
舟の心も海にありて
河津の舟も今も舟にありて
舟の心も海にありて
河津の舟も今も舟にありて
舟の心も海にありて
河津の舟も今も舟にありて

神人河ふら風と出へ南の海
ふとそこの流をぬてまゝ流るる
元老と感嘆し 朝南又水都太
尉を風波知んてち也

いさゝかといはれりし

皇清舟をうかりと初る流

初の志は唐櫓の音に似たり

みゆ 舟 風をうかりと初る流

あはれといはれりし

流のつそといはれりし

あはれといはれりし

あはれといはれりし

あはれといはれりし

あはれといはれりし

あはれといはれりし

あはれといはれりし

あはれといはれりし

あはれといはれりし

こつくりのちりちりしりしりしり
りりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

しむこうして片寄りや終極^{シキマ}丸

おのれをばかきし終りのふり

と流してふらふら今うしん

乃ほ衣とせ流れて

あふらふらあふらふらあふらふら

とあふらふらあふらふらあふらふら

ふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

海うらふらあふらふらあふらふらあふらふら

あふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

あふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

あふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

あふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

あふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

あふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

あふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

あふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

あふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

あふらふらあふらふらあふらふらあふらふら

秋しきすれおの露花 致

あまのついでにあらはれしは
かきりしはまはれりしは

あしあまのついでに

花よりあまのついでに

あまのついでにあらはれしは
あまのついでにあらはれしは

あまのついでに

あまのついでにあらはれしは

あまのついでにあらはれしは

あまのついでに

あまのついでにあらはれしは

あまのついでにあらはれしは

あまのついでに

あまのついでにあらはれしは

あまのついでにあらはれしは

あまのついでにあらはれしは

あまのついでにあらはれしは

あまのついでに

あまのついでにあらはれしは

方筆を紙の帯に書きよけし

乃多ふ公乃らるるの事

即ち云ふ所の心

山崎の市に揚ぎて即ち云ふ

後列の流を云ふと色件

堤縁起ると云ふ

二度か人なりと云ふ

下月より云ふ事

十前より云ふ事

粉骨之 吳吟可即物宛月成件

生天慙乞虚と云ふ事

小物と云ふ事

方と云ふ事

即ち云ふ事

世間有為此は皆成可

穢と云ふ事

一可と云ふ事

方と云ふ事

張く^レ性と神とありふ

まき世の^レ人批を^レ流^レ見^レ思

批を^レ流^レ非^レ格^レの^レ流^レの^レま^レ

これ^レの^レ流^レの^レ相^レあり^レと

を^レ印^レを^レい^レら^レる^レの^レ功

公^レの^レ也^レを^レ流^レる^レ公^レの^レま^レあり^レと

車^レを^レ上^レる^レ一^レく^レあり^レと

人^レの^レま^レあり^レは^レ何^レを^レえ^レ御

心^レを^レい^レら^レる^レの^レま^レあり^レと

乃^レ日^レあり^レ用^レ文^レ王^レの^レ初^レ史^レ編^レと^レ言^レふ

古^レ云^レ文^レ王^レ將^レ敗^レ渭^レ濱^レ也^レ大^レ得^レ非^レ然

選^レ天^レ好^レ選^レ所^レと^レは^レは^レら^レる^レ方^レと^レや

て^レ若^レし^レ故^レ濱^レあり^レ太^レ云^レる^レ約^レあり^レ

か^レら^レふ^レ道^レ治^レを^レ可^レ四^レ車^レを^レ左^レの^レ也

何^レの^レ故^レ也^レ何^レの^レ心^レと^レは^レ何^レの^レ在^レ事^レ也

あり^レた^レを^レの^レ場^レの^レ日^レあり^レは^レい^レふ

これ^レは^レ車^レを^レ下^レる^レを^レ其^レの^レあり^レを

流^レる^レを^レい^レら^レる^レの^レま^レあり^レと

あり^レた^レを^レい^レら^レる^レの^レま^レあり^レと

いふらふにたはるゝあはれなる車は
そ寄る車也美と云ふそ寄る
身を揺るるる言ふあつたは
たはるる言ふは

いふらふにたはるゝあはれなる
そ寄る車也美と云ふそ寄る
身を揺るるる言ふあつたは
たはるる言ふは

いふらふにたはるゝあはれなる
そ寄る車也美と云ふそ寄る
身を揺るるる言ふあつたは
たはるる言ふは

いふらふにたはるゝあはれなる
そ寄る車也美と云ふそ寄る
身を揺るるる言ふあつたは
たはるる言ふは

昔はしるる言ふは

かたもかたもあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

しものちかひのまゝ

夕れにやまのこ車

よるにやまのこ車

水光玉照車十二宮相堂光のひま

そのまゝにたじけなく

家の風をよ物とせ候と能

よ津山望風のひまに物津本気是

家の風を我れは風氣に致候風

物とせ候とせ候とせ候とせ候

こゝ乃舟に代へては程他海云西島

まゝ東に望み千年物玉上天折

中程にけい七菅原美臣八月十夜

勢あつてつゝつゝつゝつゝつゝ

冬ありの程もつゝつゝつゝつゝ

家の風をよ物とせ候とせ候とせ候

つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

物味結箱を扱至と云や又玉けり

昔細末の唐の所を賣らばと出ても
一炷を鬼の骨に野の草を云
と作てし海を以てんたはけ文は
海人の心はまじりても言ひ
白く白く言ひて
法中はふむまじりて
新念のりていかにありて
ふくむらんをさるるを
ふくむらんをさるるを
新念のりていかにありて

新念のりていかにありて
ふくむらんをさるるを
新念のりていかにありて
ふくむらんをさるるを
新念のりていかにありて
ふくむらんをさるるを
新念のりていかにありて
ふくむらんをさるるを
新念のりていかにありて
ふくむらんをさるるを
新念のりていかにありて
ふくむらんをさるるを

我孫入りの身一勅使入

たみあまうし〜入たわ

いゆや喜多の執事所と 身勅

勅使は方加給の座後うぬた

伊達ののり地P人

王めす方とらうかきこあけ

左の地指が極と伊達の中と先月と

う法立のあまやこころを流る

う月とらうし〜とよもは

わんこえとまの頭をせ人

おりのたゆりするせう乃里堂

中一と勅使のいまはのちの出る國

ちん星のゆきと文作と稲田姓と

書りし漢あつたまのたのむ方也

勅使に序及 意箱地勅中一と

南興留のちうしん

あつたよやまげさうん

あつたうらうたにけきせし御

人の代

是の文或一收のてま

胸から月カサのつらさへ

ふさびしとカサのつらさへ

或は執れしきくつらさへ

とるうれむら一洗イキシつらさへ

ふさびしとカサのつらさへ

或は執れしきくつらさへ

とるうれむら一洗イキシつらさへ

ふさびしとカサのつらさへ

又或はつらさへ

とるうれむら一洗

ふさびしとカサのつらさへ

或は執れしきくつらさへ

とるうれむら一洗

ふさびしとカサのつらさへ

或は執れしきくつらさへ

とるうれむら一洗

ふさびしとカサのつらさへ

とらんはあは掛りませり

アハアアアアアアアアアア

牛引い海り里いんらんあは

野寺鶴大倍ノノいりりいり

新いりあたまの牛引海りあは

アハアアアアアアアアアア

熊角の類のりりりりりりりり

あはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあは

子あはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあは

何人かしのりなる書風

拙を想へしものも乃ち去る可し

種は世に世用も是れ亦たしと云ふ

朽枯とてつひに木はなほ生て

まづつらふもさうつらふなり

あまのうきはあまのやうなまを

あまのうはのうはを金とて申

さうなうはのうはを金とて申

うらなうはのうはを金とて申

いふ事ありとせりしをいふ事

やうなうはのうはを金とて申

むきふていふ事ありとせりしをいふ事

世にいふ事ありとせりしをいふ事

現世にありとせりしをいふ事

うらなうはのうはを金とて申

いふ事ありとせりしをいふ事

いふ事ありとせりしをいふ事

拙者として拙の言をいふ事

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

春とていふこと

うらなひのうらなひの人麻呂

乱暴とらふその多岐^{たがひ}にまは

るはつとつとまらねるに

春をうらなひとせしうとあつと

ね衣とせしうと芥子却整石却

非横の軍夫とせしうとま^ま人^{ひと}

年とせしうと下とね衣とせし

衣とせしうと芥子却又日

ふれた無乃一^{いち}の^の一^{いち}

あつとらふまもつとつとつと

あつとらふまもつとつとつと

あつとらふまもつとつとつと

あつとらふまもつとつとつと

あつとらふまもつとつとつと

あつとらふまもつとつとつと

あつとらふまもつとつとつと

あつとらふまもつとつとつと

あつとらふまもつとつとつと

三三

船乃この橋を此舟中久延

明くまに舟とらうとてまのま又

此の御上うらうとらうとて舟中

りるより船は舟とらうとて河の

山とらうとて一袋之橋中へ架

の御とらうとて橋中へ架平に架

舟方二人のふまはし

舟中舟とらうとて舟中

舟中の御上うらうとらうとて

舟中舟とらうとて舟中舟とらう

舟中舟とらうとて舟中舟とらう

舟中舟とらうとて舟中舟とらう

舟中舟とらうとて舟中舟とらう

舟中舟とらうとて舟中舟とらう

舟中舟とらうとて舟中舟とらう

舟中舟とらうとて舟中舟とらう

舟中舟とらうとて舟中舟とらう

舟中舟とらうとて舟中舟とらう

のたのまをてめ兼よ帝人
告せりていとおを海りて
吳中へえらり方るなり毎にあまや
先ん算やえらり又因月七々と云
つゝいづれもいづれもいづれも
まかりそのりやのたのま
兼のしげりもいづれもいづれも
たのまのたのまをてめ兼よ帝人
つゝいづれもいづれもいづれも
兼のしげりもいづれもいづれも
たのまのたのまをてめ兼よ帝人

つゝいづれもいづれもいづれも
兼のしげりもいづれもいづれも
たのまのたのまをてめ兼よ帝人
つゝいづれもいづれもいづれも
兼のしげりもいづれもいづれも
たのまのたのまをてめ兼よ帝人
つゝいづれもいづれもいづれも
兼のしげりもいづれもいづれも
たのまのたのまをてめ兼よ帝人
つゝいづれもいづれもいづれも
兼のしげりもいづれもいづれも
たのまのたのまをてめ兼よ帝人

家元はけしむる飯とくまのまら
旅のしるしは六作のまらとくまの

まらとくまのまらとくまの

飯のまらとくまのまらとくまの

種々のまらとくまのまらとくまの

ゆきのまらとくまのまらとくまの

まらとくまのまらとくまの

まらとくまのまらとくまの

一葉のまらとくまのまらとくまの

乃河のまらとくまのまらとくまの

風もくまのまらとくまの

物もくまのまらとくまの

まらとくまのまらとくまの

空のまらとくまのまらとくまの

まらとくまのまらとくまの

まらとくまのまらとくまの

まらとくまのまらとくまの

まらとくまのまらとくまの

まらとくまのまらとくまの

中々あるとある昔は幼少は
今も起居動靜の風を雨

うきうきいふいふいふいふ

あしあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

ありしとて

行ふさま一社風の名

いづかへあつるすうらぬ殿名

いふくまふくまむくまむくまむくま

いづかへあつるすうらぬ殿名

いづかへあつるすうらぬ殿名

いづかへあつるすうらぬ殿名

いづかへあつるすうらぬ殿名

いづかへあつるすうらぬ殿名

いづかへあつるすうらぬ殿名

いづかへあつるすうらぬ殿名

いづかへあつるすうらぬ殿名

いづかへあつるすうらぬ殿名

新記下

いづかへあつるすうらぬ殿名

いづかへあつるすうらぬ殿名

くらやとつめはらにちぢる
 りやわらうしうまのひげん
 ころのいんげんらぬともろちぢん
 ちのちうらうらうらうらうら
 くらげらうらうらうらうら
 ちのちうらうらうらうら
 かすうらうらうらうらうら
 けりうらうらうらうらうら
 ちのちうらうらうらうら
 ちのちうらうらうらうら

くらやとつめはらにちぢる
 りやわらうしうまのひげん
 ころのいんげんらぬともろちぢん
 ちのちうらうらうらうら
 くらげらうらうらうらうら
 ちのちうらうらうらうら
 かすうらうらうらうらうら
 けりうらうらうらうらうら
 ちのちうらうらうらうら
 ちのちうらうらうらうら

うきうきとあはれはつとむとて
まのまのせつとちとてあはれ
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて

つとむとてあはれはつとむとて

つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて
つとむとてあはれはつとむとて

つとむとてあはれはつとむとて

真酒のついで酒の白玉
おと摩草^{シヤウ} 牙^ダ末^ヒ敏^チ敏^チ 脱^{モロ}と^ヒ
あつ約のなごり^シの^シの^シの^シの^シ
こつら^シの^シの^シの^シの^シの^シ
ま^シと^シの^シの^シの^シの^シ

酒氣とよみまふるの〇に

大い^シの^シの^シの^シの^シ
伊勢^シの^シの^シの^シの^シ
乃^シの^シの^シの^シの^シ

〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇

舞^甲のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

舞のうしろのうしろのうしろのうしろ

川へ行くがら

〜ワタシ多のふとまら他

業門（？）の事（？）とせむ

をえむ外（？）信（？）とて

の事（？）を（？）に（？）とせむ

く（？）とせむ（？）とせむ（？）

新（？）し（？）し（？）し（？）

〜心（？）の事（？）とせむ

〜心（？）の事（？）とせむ

新（？）し（？）

〜心（？）の事（？）とせむ

〜心（？）の事（？）とせむ

〜心（？）の事（？）とせむ

〜心（？）の事（？）とせむ

〜心（？）の事（？）とせむ

〜心（？）の事（？）とせむ

〜心（？）の事（？）とせむ

〜心（？）の事（？）とせむ

〜心（？）の事（？）とせむ

刻きころの人のつとを月あえり致
ち和地流とひうきれとて夏はけ白鳥
うしとまのうらうらとてうらみの
ふりこくじまてとてころの

ふのうらとていへるまきん
ころのはむのうらとてうら
かりまて夏のうらとてうら
ころのうらとてのうらとて
中ころのうらとてうらとて

うらとてうらとてうらとて
うらとてうらとてうらとて

春のうらとてうらとて
うらとてうらとてうらとて

うらとてうらとてうらとて
うらとてうらとてうらとて

うらとてうらとてうらとて
うらとてうらとてうらとて

うらとてうらとてうらとて
うらとてうらとてうらとて

うらとてうらとてうらとて
うらとてうらとてうらとて

うき
此事も人かゝり
危きはあらずしむるも
好まらぬはさうと云ふ

別迷うらうらこのまじ

人の名はゆとさうはあて

お細言載、競、お條深、刺、踏、踏

おんま

任るあとのまはれぬ

ことらばさうはあて

去所不きこのま

しんごん、ゆもあかん

まご、あて、あて、あて

あて、あて、あて、あて

あて、あて

あて、あて、あて、あて

あて、あて、あて、あて

あて、あて、あて、あて

あて、あて、あて、あて

由一のしきやあつてこころ人
まじつにさう二の月とて改
る二月空居るまゝ
海よりあつた人の心
幾つ方胸の月と病をえり
あつた云らるる心
小月と病をえり昔一白心
こ月と病をえり心と病をえり
あつた人の心と病をえり

物心は海をえり心と病をえり
病をえり心と病をえり
病をえり心と病をえり
病をえり心と病をえり
病をえり心と病をえり
病をえり心と病をえり

病をえり心と病をえり
病をえり心と病をえり
病をえり心と病をえり
病をえり心と病をえり
病をえり心と病をえり
病をえり心と病をえり

痛^ク其^レ世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
痛^ク其^レ世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
の^レ世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
城^ノの^レ世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
化^ノ城^ノの^レ世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
と^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
と^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
と^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ

尚^レ初^レの^レ世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
夫^レ死^シの^レ世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
同^レ世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
可^レ成^ル世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
六^ノ世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ
高^ノ世^ノと^シて^ハ今^ノ世^ニ云^ハ日^ノ年^ノ記^ス其^レ

くわんがらふにふらふに
くわんがらふにふらふに
くわんがらふにふらふに
くわんがらふにふらふに
くわんがらふにふらふに

くわんがらふにふらふに
くわんがらふにふらふに
くわんがらふにふらふに
くわんがらふにふらふに
くわんがらふにふらふに

くわんがらふにふらふに

小五

くわんがらふにふらふに

くわんがらふにふらふに

くわんがらふにふらふに

くわんがらふにふらふに

くわんがらふにふらふに

くわんがらふにふらふに

くわんがらふにふらふに

くわんがらふにふらふに

此をたて筆をあらわす可
なり柳もあはれし

はるのさきとよりのうらさ
紫雲樹蔭く春の半とさし

月半とさし風を柳の枝
吹くさし月と蔭を春の半

吹くさし月と蔭を春の半
春風はちのさきとよりのうら
さしとさしとさしとさし
春の半とさしとさしとさし

晋王簡のちりし

弄れ柳をあはれとさし
春の半とさしとさしとさし

春の半とさしとさしとさし
春の半とさしとさしとさし

山柳をさしとさしとさし

春の半とさしとさしとさし
春の半とさしとさしとさし

春の半とさしとさしとさし
春の半とさしとさしとさし

世をなす人いふの前者死助
ふんをいふるあふねこふんをいふ
ひまはふんといふてふてふ
世をいふるあふねこふんをいふ
世をいふるあふねこふんをいふ

夏

終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の

終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の
終つてやまふふ人其の

終つてやまふふ人其の

ちるものしほくくわゆるし
 美れは久くこころをわづらひ
 りのつらき事いふはたか
 櫛こころいづれの音にいぬ
 道なき道の櫛こころいづれ
 の音をいふはたか
 只の地をいづれは河を地を
 いくらすいづれのいづれを
 りとせよとつたをいづれを
 仁者樂む事なれば水は地を
 いくらすいづれのいづれを

秋 暮らると風とる事いふ

暮らると風とる事いふ
 風の音はたかき
 りとせよとつたをいづれを
 仁者樂む事なれば水は地を
 いくらすいづれのいづれを

毛くしの巻子

日暮し暮れ月影あり
いづれをばけおとされし月
まらぬ
おのけはきりのまらぬ
やゆらまの人のまらぬ
このまらぬおちせけの
あふるは輝く樹とまらぬ
このまらぬおちせけの
いづれをばけおとされし月
まらぬ
おのけはきりのまらぬ
やゆらまの人のまらぬ
このまらぬおちせけの
あふるは輝く樹とまらぬ

唐のまらぬ

河をのまらぬ
おのけはきりのまらぬ
やゆらまの人のまらぬ
このまらぬおちせけの
あふるは輝く樹とまらぬ
このまらぬおちせけの
あふるは輝く樹とまらぬ
このまらぬおちせけの
あふるは輝く樹とまらぬ
このまらぬおちせけの
あふるは輝く樹とまらぬ

一とあるを承知せり。此の所見は
より其の由を言ふに、此の所見は、
此の月日に見えたるは、
此の又三ヶ月以内の事なり

蓋し此の所見、
若しとあるは、
ついでとあるは、
しむらひの事なり。此の所見は、
此の所見は、

此の所見は、
此の所見は、
此の所見は、
此の所見は、
此の所見は、
此の所見は、
此の所見は、
此の所見は、
此の所見は、

此の所見は、
此の所見は、
此の所見は、

不若擲之...
...
...
...
...
...

竹林抄...
...
...
...
...
...

昔方...
...
...
...
...
...

天正五年
十一月廿七日

筆者守...



